花名の話題（その２）

TI

可愛らしい姿にも関わらず可哀そうな名前の花があります。例えば、以前に紹介しましたヘクソカズラ（屁糞葛）などです。今回は、その続編で３つ紹介します。

１．　ママコノシリヌグイ（継子の尻拭い）

花名「ママコノシリヌグイ」を漢字で書くと「継子の尻拭い」です。この花はピンクと白の紙風船を思わせるような３～４mm の小花が丸く集まって付き、とても可憐です（図１参照）。しかし、その茎には下向きの逆トゲが付いています。葉の裏にもついているそうです。「ママコノシリヌグイ」は、他の草木などに寄りかかりながら蔓（つる）性の枝を伸ばしていくのですが、このとき逆トゲは周りのものに引っかかって茎を固定するのにおおいに役立つのです。

「継子の尻拭い」の継子とは、血の繋がりのない子供のことを指します。つまり**「血の繋がりのない憎い継子のお尻を、トゲのある葉や茎で拭く」**という例え・想像から、和名がついたようです。昔は、厠（かわや）の落とし紙に、紙は高価なため植物の葉を使用していました。継母の継子いじめは、童話「シンデレラ」で有名ですが、日本においても源氏物語に『継母の腹ぎたなき昔物語も多かる』との記述が出てきます。韓国での花名は、「嫁の尻拭き草」だそうです。この国では「嫁いじめ」になっています。「継子の尻拭い」の別名は、トゲソバ（棘蕎麦）です。ソバ（蕎麦）の花に似て棘（トゲ）があるのが由来です。「継子の尻拭い」は、インパクトが強いためか「棘蕎麦」よりより好まれて多く用いられているようです。

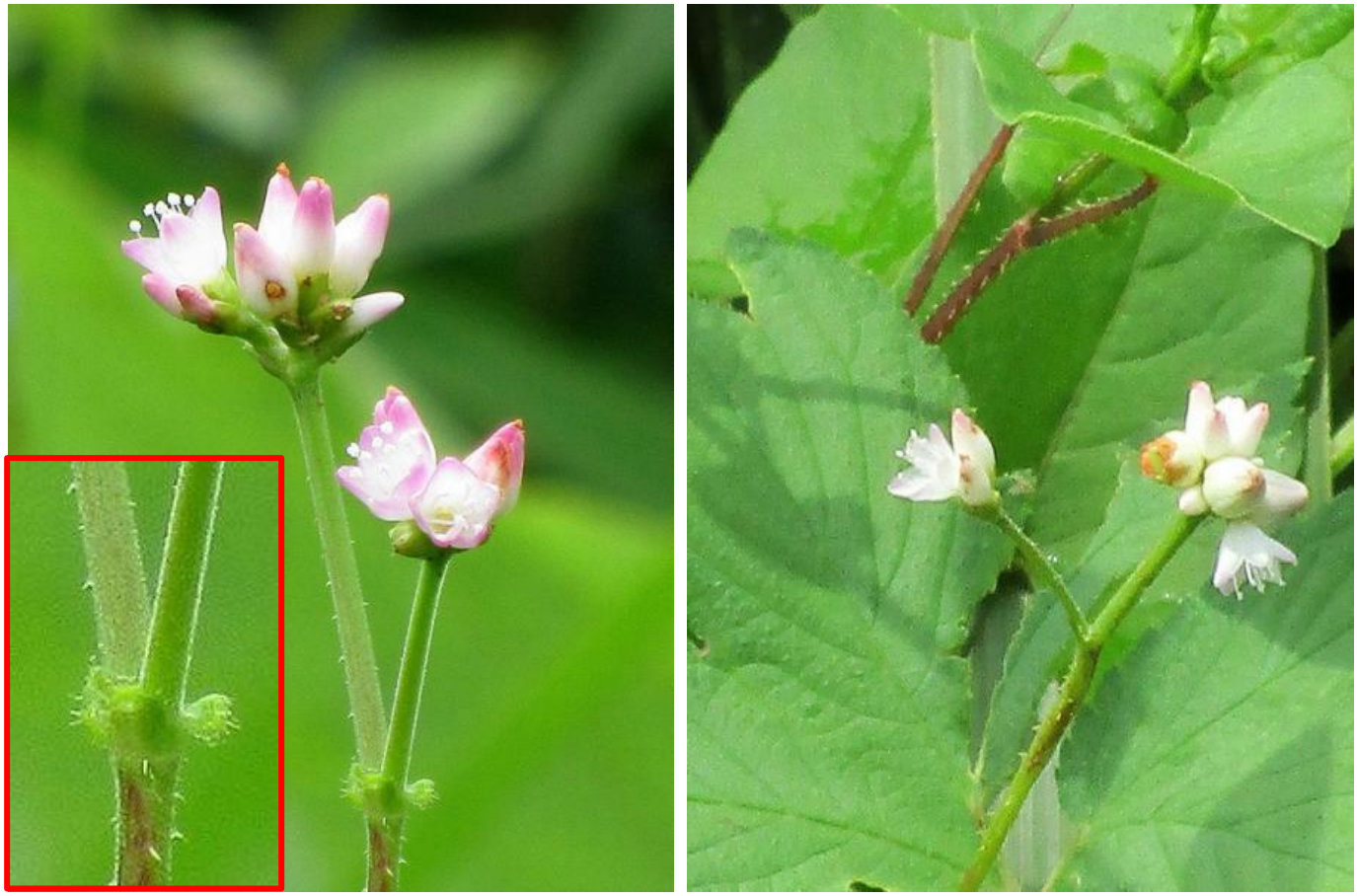


図１　ママコノシリヌグイ（継子の尻拭い）：左図内の拡大図には下向きの逆トゲがよく見えます。

「嫁いじめ」に関しては、似た様な由来を持つ貝名「ヨメガサラ（嫁が皿）」があります。その由来・語源に関するインターネット記事（from ぼうずコンニャクの市場魚貝類図鑑　ヨメガカサ）を以下に紹介します。

『ことばの歳時記』（金田一春彦　新潮文庫）に「ヨメガサラ」という貝が出てくる。これがどうもヨメガカサのことであるようで、本種を「かさ」ではなく「さら」という地域は多い。『日本貝類方言集』（川名興　未来社）徳島県、和歌山県などかなりの地域で「嫁が皿」もしくは「嫁皿」と呼ばれていることが出ている。金田一春彦は軟体類学者の波部忠重から聞いた話として“嫁にはたくさん食べさせないように浅い皿で食べさせる、という嫁いびりの習慣から名付けた”とある。

2.　ハキダメギク（掃溜菊）とワルナスビ（悪茄子）

ハキダメギク（掃溜菊）（図２参照）は、道ばたや庭などに生えている雑草で、いたるところで見られます。植物学者の牧野富太郎博士が、世田谷区経堂の「掃き溜め」で見つけて命名したそうです。大正時代に侵入した熱帯アメリカ原産の１年性の帰化植物で、現在では日本各地に広がっています。繁殖力旺盛で畑の脇や道路脇の植え込みなどちょっとした空き地を見つけどんどん広がり、夏の初めから秋の終わりまでほぼ１年中見られます。しかし、ハキダメギク（掃溜菊）とは「掃き溜め」で見つけられた故の命名とはいえ、気の毒な名前になったものです。牧野富太郎博士の命名は 2500 種以上に及んでおり、数の多さからそれなりの苦労があったものと思われます。

参考

牧野富太郎博士［1862（文久２年）-1957（昭和３２年）］は、「日本の植物学の父」といわれ、多数の新種を発見し命名（2500 種以上：新種 1000、新変種 1500）も行った近代植物分類学の権威です。その研究成果は 50 万点もの標本や観察記録、そして『牧野日本植物図鑑』に代表される多数の著作として残っています。小学校中退でありながら理学博士の学位も得て、生まれた日は「植物学の日」に制定されています。「雑草という名の植物は無い」という発言があります。また、世俗の生活を捨て植物の分類に打ち込んだ博士の面白いエピソードが数多く残っています。

図２　ハキダメギク（掃溜菊）

図３　牧野富太郎（from ウィキペディア）

一方、ワルナスビ（悪茄子）（図４参照）も博士が命名したもので、その植物種の性質が短い言葉で巧く言い表されています。

ウイキペディア「ワルナスビ」によると、ワルナスビ（悪茄子）はアメリカ合衆国南東部（カロライナ周辺）の原産のナス科の多年草です。日本では、1906 年（明治 39 年）に千葉県成田市の御料牧場で博士により発見及び命名され、以降は北海道から沖縄まで全国に広がっています。

図４　ワルナスビ（悪茄子）

1980 年代頃から有害雑草として認識されるようになりました。鋭い刺や毒を有するため、家畜に被害を与え、作物の品質を低下させます。特にナス科であるため畑に生えるとナス、トマト、ジャガイモなどのナス科の作物に２年の連作障害を与えます。また、直接、畑などに生えなくとも付近の空き地などに生えただけでナスやジャガイモなどの作物の害虫であるニジュウヤホシテントウの温床ともなり、付近のナス科作物に飛び火するため農業関係者からすると非常に厄介な雑草になっています。同様の被害は、同じナス科の雑草であるイヌホオズキなどでも起こりますが、ワルナスビの方が駆除のより困難さがありはるかに厄介になっています。現在、外来生物法により要注意外来生物に指定されています。

牧野富太郎博士が発見・命名した植物は、私たち地域にもあります。それは、「飯能ササ」です。天覧山の裏手から多峯主山（とうのすやま）方面に下りて少し平坦な道を進むと、今度は「見返り坂」という名の登り坂になります。この坂に取り掛かった右手に「飯能ササ」の解説板が立っています。

この笹は、アズマザサの仲間で特徴は、根茎が横に走り、茎はこげ茶色をして真直ぐ立ち高さは 150 ㌢㍍内外で直径 0.6 ㌢㍍程になります。茎の上部で技分れして普通葉鞘に包まれています。枝の端には、掌状様、羽状に数枝の葉が集まってついています。葉は細長く長さ 13～20 ㌢㍍、幅２㌢㍍内外で先はとがっています。質は薄い洋紙質で表面には毛がなく、裏面にはビロード状の細毛があります、中央の脈は、細く裏面に隆起していてこの両側に５本から８本の脈をもっています。冬期には、葉のふちは白色となります。

現在は、見返り坂右手に主として生育していますが、左手前の水田地内及び道路沿いに広がりつつあります。

昭和 16 年３月 31 日県指定天然記念物　（from 飯能百景　24　見返り坂の飯能笹）

ここの約 15 平方㍍の地域内に「飯能ササ」がアズマザサ等と混生しています。ここをハイキングで何度か通過しています。そのたびに「飯能ササ」を探すのですが、残念ながら未だそれと認識できていません。

３．　オオイヌノフグリ（大犬の陰嚢）

可哀そうな花名として「オオイヌノフグリ（大犬の陰嚢）」も代表格の一つです。花の大きさは8～10ミリと小さいですが、綺麗なコバルトブルーで人々を魅了します（図５参照）。

路傍や畑の畦道などに見られる雑草です。和名は、イヌノフグリに似てそれより大きいために付けられました。フグリとは陰嚢のことで、イヌノフグリの果実の形が雄犬の陰嚢に似ていることからこの名前が付いたそうです。この果実については、手持ちの写真が無いため、インターネット記事「京都九条山の自然観察日記 2008年03月14日 （金）オオイヌノフグリ」のもの（図６参照）を示します。果実はハート型でフグリには余り似ていないそうです。イヌノフグリについては、現在、絶滅危惧Ⅱ類に分類されていて余り存在せず、両者の比較観察は難しそうです。

前記「イヌノフグリに似てそれより大きい」の念のための説明です。「オオイヌノフグリ」は、「大きな、犬のフグリ」でなく、「大きな犬の、フグリ」でもなく、「大きな、イヌノフグリ」なのです。つまり、「姿がイヌノフグリに似ている大きな植物」だったのです。また、決して「Oh! イヌノフグリ」でもありません。

図５　オオイヌノフグリ（大犬の陰嚢）

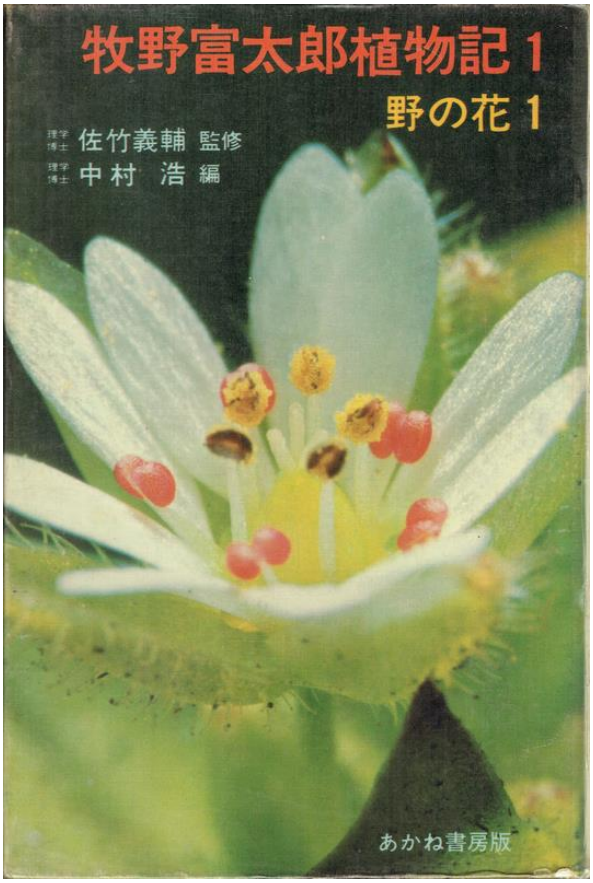
図６　オオイヌノフグリの果実

(from 京都九条山の自然観察日記 2008年03月14日 （金）オオイヌノフグリ)

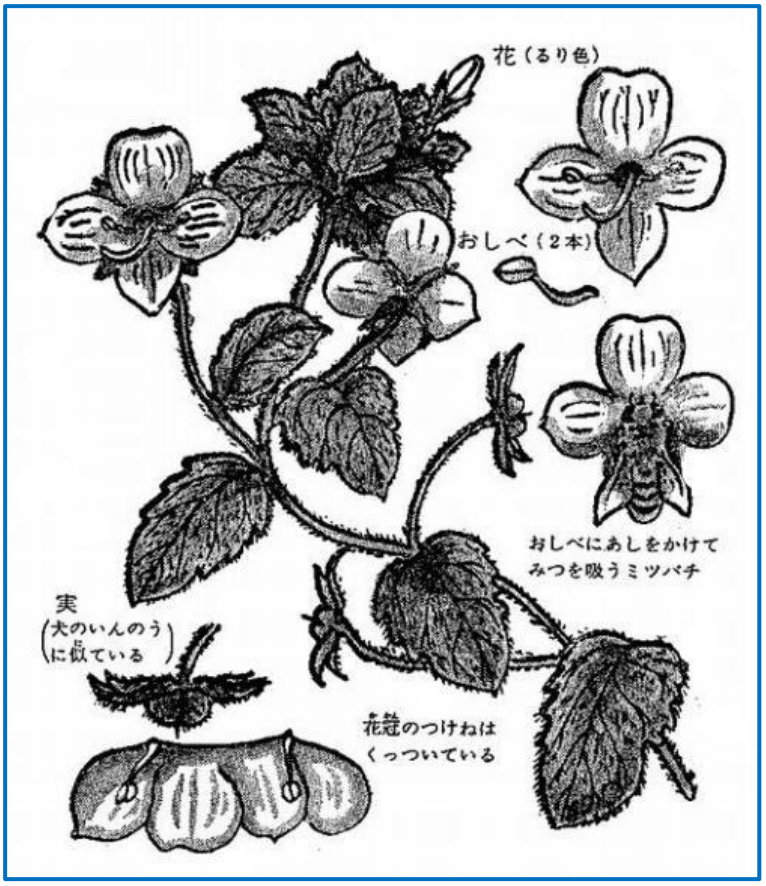
「オオイヌノフグリ（大犬の陰嚢）」の命名者を牧野富太郎博士とするインターネット記事がしばしばありますが、これは誤りです。正確には、江戸時代に日本在来種（あるいは史前帰化）の「イヌノフグリ」が既にあったのです。その後（明治時代）に欧州から渡来したものに博士が、その名の先頭に大きい意味の「オオ（大）」を付けて「オオイヌノフグリ」と新称を与えたのです。

牧野富太郎博士から親しく教えを受けた弟子の一人である中村博博士が編者となり、少年少女向きに牧野先生が直接語りかけるように書かれたシリーズ本があります。その内の一冊「牧野富太郎

植物記１　野の花１（図７(a)参照）」において、「第３節　春の野の花」の中で「オオイヌノフグリ」が紹介されています。ここに、花名の経緯も説明されています。以下に、少し長いですが転記します。



(a)　表紙



(b)　図 33　オオイヌノフグリ　(p.81)

図７　本「牧野富太郎植物記１　野の花１」

(p.80)

春の野に見られる野草は、春のつみ草などで人々に親しまれてきましたが、長い冬が終わって暖かい春のひざしのもとに咲きだす野の花のすがたは、ひとしおの感興をよびおこすものです

早春、いち早く咲きだす花にオオイヌノフグリ(図 33)があります。この花は小さいながら、その美しさは人々の目をうばいますが、なんとなくバタくさい感じで園芸植物の感じもします。それもそのはずで、この草は、もともと外国の草で、そのふるさとはヨーロッパだと思われます。

この草は、元来日本にはなかった草で、江戸時代までは、この草はまったく人の目にふれることがありませんでした。このため古い歌や物語などには全く出てくることがないのです。

この草が日本にわたってきたのは、明治のはじめといわれていますが、わたしがはじめてこの草を見たのは明治１７年でした。採取した場所は今の上野公園で、そのころはまだ野原で、東京市内でも道ばたにはいろいろな草がおいしげっていました。

――　略　――

(p.82)

わが国には、もともとオオイヌノフグリに似たイヌノフグリ（図 34）という草がありますが、この草はオオイヌノフグリに比べるとずっと小がらで、花もオオイヌノフグリように美しいるり色ではなく、うすべに色をしています。近ごろでは、オオイヌノフグリがいたるところで繁茂し、在来のイヌノフグリはこれにおされぎみで、すっかり影が薄くなってしまっています。

―― 略 ――

(p.85)

イヌノフグリのなかまの実は、二子山のように二つにくびれていて二つの乳房がならんでいるように見えます。

乳房ならほほえましいといえますが、昔の人はこれを雄犬のまたのあいだに見えるフグリに見たててイヌノフグリという名を与えたのです。―― 略 ――

しかし、こうしたかわった名は一度おぼえたら忘れがたいものです。イヌノフグリ、おおいにけっこうです。

昭和のはじめごろでしたか、ある学者がイヌノフグリという名は教育上けしからんといって、この草の名をハタケクワガタに変えようといいだしましたが、ついに変えることはできませんでした。

―― 略 ――

しかし、ものの名前というものは、そうむやみに変えてよいはずのものでなく、よほど特別の理由でもないかぎり、むかしからのよび名を尊重すべきだと思います。

俳句の世界では単に「いぬふぐり」と言えば、一般的にオオイヌノフグリを指し、 春の季語になります。これを詠みこんだ高浜虚子の句があります。

犬ふぐり　星のまたたく　如くなり

水際まで　咲き拡がりし　犬ふぐり

イヌノフグリが江戸時代に既に存在したことは、江戸時代後期に書かれた「草木図説(1856 年安政 3 年 飯沼慾斎〈いいぬま よくさい〉著)」に、イヌフグリ（後にイヌノフグリ）が日本在来種（あるいは史前帰化）として載っていたことを根拠にしています。「イヌノフグリ」の命名者については、よくわかっていません。米粒より小さいものに対する命名者の観察眼の鋭さとイメージ力の豊かさに大いに感服いたします。

オオイヌノフグリを「千葉県の柏あたりではホシノヒトミ（星の瞳）とよぶ方言がある」との記載記事（レファレンス事例詳細）があります。なんとロマンチックな命名でしょうか。命名にはかなりのロマン力が必要と思われます。高浜虚子の句「犬ふぐり　星のまたたく　如くなり」は、オオイヌノフグリの別名「ホシノヒトミ」を連想させます。高浜虚子は、この別名を知っていて詠んだのでしょうか？

早春一番に咲く雑草の花は、オオイヌノフグリです。可憐なコバルトブルーの花を咲かせます。その後の４、５月になって、タチイヌノフグリ（立犬の陰嚢）がもっと小さな花を咲かせるのだとか。ヨーロッパ原産の帰化植物であり、明治初期に渡来したとされています。私は未だ見たことがありません。インターネット記事（岡山理科大学 生物地球学部 生物地球学科 HP：タチイヌノフグリ）からの写真を図８に載せておきます。「タチイヌノフグリ」の命名者を調べてみましたが、日本人の誰であるかはわかりませんでした。参考までに、その花名の由来は、「立っている犬の、フグリ」ではなく、「根元から茎が立ち上がった、イヌノフグリ」ということでした。（図８参照）

図８　タチイヌノフグリ（立犬の陰嚢）：根本から茎が立ち上がり、花が咲いています。
（from 岡山理科大学 生物地球学部 生物地球学科 HP：タチイヌノフグリ）

ヨーロッパ原産のオオイヌノフグリやタチイヌノフグリと同属の帰化植物ですが、名前に「イヌノフグリ」が付かない唯一の植物があります。「フラサバソウ（FraSava 草）」です。花は、オオイヌノフグリと比べてぐっと小さいそうです。この花名の由来は以下の通り。

日本で最初にフラサバソウを発見・採集し、記録に残したのがフランス人研究者のフランシェ（Franchet）とサバチェ（Savatier）。この２人が共著として 1875 年（明治８年）にフランスで刊行した『日本植物目録』の中に、本種が明治初年（1868 年）に長崎で採集されたことが記録されていました。その後、長らく日本でこの植物を見た人はいませんでした。日本名がついたのはずっと後の話（1937 年；昭和 12 年）ですが、命名者は最初に本種を記録した２人を記念し、フランシェとサバチェの両氏の名前を略してフラサバソウ（FraSava 草）と名付けました。
（from ビオ・荒川さいたま：フラサバソウ）

私なら、フラサバ・イヌノフグリと命名したくなるのですが。